The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈書評〉陳桐生著『《孔子詩論》 研究』
Author(s)	上野, 洋子
Citation	中国研究集刊. 2005, 38, p. 196-204
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60775
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『戦国楚簡研究２００５』（『中国研究集刊』別冊特集号（総38号）　平成十七年十二月　一九六―二〇四頁

〈書評〉陳桐生著『《孔子詩論》研究』

上野洋子

二〇〇一年十一月に公開された『孔子詩論』（仮題、『上海博物館蔵戦国楚竹書（一）』所収。以下、『詩論』と称す）は、詩経研究に新しい動きを齎す新出土資料として、非常な驚きと期待をもって迎えられた。公開直後、相次いで発表された関連研究のほとんどは、竹簡の配列や文字の隷定・釈文に関するものであったが、それも現在ではほぼ出揃った感がある。現在も、『上海博物館蔵戦国楚竹書』の続編によって新たな出土文献が次々と公開されているため、『詩論』研究に以前のような勢いは見られないが、「簡帛研究」（http://www.jianbo.org/）等では、研究成果が継続的に発表されている。

今回取り上げる陳桐生氏（以下、著者と称す）の『《孔子詩論》研究』（中華書局、二〇〇四年十二月、横組簡体字、三四一頁）は、これまでの『詩論』研究を踏まえつつ、新たな視点による研究成果をまとめたものである。

本書の構成は以下の通りである。

从《孔子诗论》看战国南楚《诗》学（代序）
一　战国南北学术中心
二　战国南楚的经学研究
三　战国南楚《诗》学特点
四　本书宗旨和方法
第一章　《孔子诗论》的作者与时代
一　孔子说
二　子夏说
三　子羔说
四　子上说
五　不知名说
六　竹书成书年代考
第二章　《孔子诗论》学术思想考源

一　竹书之前的诗乐教化传统
二　竹书《诗》旨溯源

第三章　《孔子诗论》的理论创新

一　说《诗》方法的重大转变
二　概括四类《诗》旨
三　初步确立说《诗》理论模式
四　竹书未涉及的理论

第四章　《孔子诗论》与汉代《诗》学

一　汉代《诗》学的两大来源
二　荀子：从南楚《诗》学到汉代《诗》学的中间环节
三　《孔子诗论》在汉代或有传本
四　《孔子诗论》与《鲁诗》
五　《孔子诗论》与《齐诗》
六　《孔子诗论》与《韩诗》
七　《孔子诗论》与《毛诗》

附录一　《孔子诗论》简注
附录二　《孔子诗论》与先秦两汉说《诗》文献对照表
附录三　《孔子诗论》研究论著目录索引

全二十九簡(注1)のうち、半分以上が欠損簡である『詩論』を検討するには、まず竹簡の配列・釈読について整理する必要がある。著者は基本的に馬承源氏の説（『上海博物館蔵戦国楚竹書（一）』所収の釈文）に従い、諸説を参考する手法を採用している。以下、本書の内容を順次まとめつつ、寸評を試みたい。

「代序」では、『詩論』が戦国期の南方楚における詩学を代表する文献であったことを詳説する。著者は、『詩論』が登場する背景を説明するために、戦国中期に最盛期を迎えた楚の学術活動を概観し、更に孔子の事跡等を踏まえ、楚地における経学の定着・展開について確認する。

ここで注目すべきは、『詩論』の特性をより明確にするための比較対象に、『孟子』を北方詩学の代表として挙げる点である。著者は、両者が共に孔学を宣揚し、心性論を学問の根底としながらも、詩学における基本的立場は異なると指摘する。すなわち、『孟子』が王道政治に基づく歴史的観点から詩を理解するのに対し、『詩論』は詩そのものによって詩を理解する傾向を持つというのである。

このように著者は、次章以降で『詩論』の成立・作者の問題、及び理論体系や詩学史上の意義を明らかにすべく、その前段階として、『詩論』をめぐる時代的・地理的背景を可能な限り明らかにしようとする。

第一章では、『詩論』の成立時期と作者に関する先行研究を紹介し、それらの問題点を整理しながら、著者独自

の見解を提示する。

著者は、戦国儒者の大半は曾参や孟子と異なり後世名を残すことのなかった者達であると推察し、『詩論』の作者もその群に属する可能性を示唆する。筆者が孔子作者説や子夏作者説等に疑義を示す一方で、孔子再伝の弟子を作者とする陳立氏の見解を肯定的に評価するのも、作者を特定の個人と限定する危険に配慮するためであろう。

但し著者は、陳氏の見解をもう一歩進めるべきだとして、『詩論』の成立時期と作者とを確定するための指標を十二個挙げながら考察を進める。そして最終的に、「我认为《孔子诗论》的成书年代大致在子思之后、孟子之前，它的作者是专治《诗三百》的儒家经师，与讲心性学说的子思派学者有着紧密的学术联系」（九六頁）、つまり『詩論』は子思から孟子の間に成立したものであり、その作者は「詩三百」を専門とし、また心性論を掲げる子思学派と何らかの密接な関係を持つ儒者であったとの結論を導く。

第二章では、『詩論』がその学術思想の形成のために吸収した思想的要素を、主に「诗乐教化传统」という観点から検証する。

筆者は、西周初年から戦国前期にいたる「诗乐教化传统」を確認した上で、それらと『詩論』との関連性を逐一指摘し、『詩論』の詩学史的位置を明確化しようとする。例えば、呉の公子季札が各地方の詩楽を論評したこと（『左伝』襄公二十九年）について、著者は「他评论音乐的方法是先从音乐旋律中品味其中的情感，再从音乐的〝怨〟、〝优〟、〝思〟、〝惧〟、〝乐〟等情感表现来判断该国的政治状况」（一〇九頁）と分析し、国風による「溥観人俗」（第三簡）を記す『詩論』の説は、季札のこうした思想を受け継ぐものと述べる。

また、孔子『論語』や子思『中庸』『性自命出』に対してもこのような検討を行った上で、更に従来の詩楽思想に対して孔子が提示した創見、つまり詩を断章取義するのではなく、詩そのものの吟味を重視するという思考、及び後の子思学派による性情理論と礼学との確立に注目し、それらが『詩論』における学術思想の根本になると結論づける。

第三章では、詩を説く手法が転換を迎えた背景、及び『詩論』の理論（「说《诗》方法论」「《颂》《大雅》《小雅》《邦风》四类诗的大旨」等）について分析を行う。著者は、『詩論』に登場する四種類のカテゴリ「四類詩」（「訟」「大夏」「小夏」「邦風」）が、詩を個別的に論じる手法から詩を体系的に論じる手法への、画期的な転換をあらわすものと考える。

その背景には、儒家の詩楽理論をとりまく状況や風習の変移がある。戦国前期、儒家の心性論が文学理論に浸透したことで、儒者は詩歌に表れる情感の本質を認識し、またその情感を礼儀で節すべきとの考えを具体的に持つようになる。折しも、鄭や衛に起こった新楽によって戦国諸侯の古楽離れが起こり、断章取義の風潮も衰退に向かう時期であった。政治的な断章取義の対象であった「詩三百」が、次第に吟味・研究の対象となったため、そこで初めて『詩論』のような、自覚的な分類研究が必要になったと著者は述べるのである。

『詩論』は、「四類詩」の主旨を、教化と密接に関わる「徳」の概念で把握する。「徳」に基づいた統治による民心の獲得は儒家が重んじるところであり、文王はその典型とされる。筆者は、理想的統治者である文王を称賛する詩が『詩論』に多いこと、礼儀によって性情を節制する傾向、及び教化思想が読み取れることから、子思学派の思想を吸収した作者は、文王を称えた詩への評論を通し、詩楽による教化という思想で詩の解釈を統一したと述べる。

また、「徳」同様「命」「誠」も文王と密接に関わる重要なタームとされる。これらについて筆者は、天に由る「命」が「徳」として人間に内在し、それが偽りなき「誠」として発現すると捉え、その理想的な在り方、つまり一般の「民性」にとっての模範が文王であったと解釈する。

『性情論』『性自命出』は、人性への探索、及び礼儀に関する論を中心とするものであった。つまり、天命は人性を付与し、その性は心に頼る。その心の方向性を導くのは、「物」「習」という外的要素であるため、人性に対しては詩書礼楽による教化が重要となってくる。

著者は、『詩論』が子思学派のこうした性情理論に基づく文献であるとし、『詩論』における「民性固然」の一句をその根拠とする。著者によれば、「民性」は「性は命より出で、命は天より降る」(『性自命出』『性情論』)、つまり天が賦与する「性」とされ、「固然」は「〔民性とは〕性情論にある通り、天に基礎づけられたものである」と、「民性」が子思学派の理論に基づいて現出することを確認する言辞と理解される。

では、こうした性と詩との関係はいかなるものか。筆者は次のように考える。天が賦与した性は情の根源であり、人間の生命と共存・連動する。生命が感動し性が躍動すれば、それが契機となって詩楽が生まれる。つまり、『詩論』における「民性」は、詩が生ずる根本的な要素を示す名称とされるのである。

このように、筆者は『詩論』の理論を性情思想から解

釈する。その他、『詩論』と性情理論との思想的関連性が窺える例としては、「詩亡隠志」（第一簡）が挙げられよう。この句は、『尚書』堯典の「詩言志」に依るとされるが、「志」の解釈については諸説あった。ところが筆者は、『性自命出』『性情論』等を新たな判断材料とし、戦国中期以前の儒家は、詩楽の「言情」という本質を既に認識していたと考え、「志」を「情」と理解する。

『詩論』と性情理論との関連性については、既に李学勤氏が「（《诗论》）涉及性、情、德、命之说，可与同出《性情论》（郭店简《性自命出》）等相联系」（一三五頁）と示唆している。著者はこの点について、これまで見てきたような複数の視点から更に踏み込んだ考察を行い、子思学派における性情理論と詩論との本質的な繋がりを見出すに至るのである。

第四章では、前章において分析した『詩論』の理論が漢代詩学における基礎の一端をなすことについて、具体的な検討が行われる。著者は、『詩論』と四家詩との影響関係を論証するために、各家詩の素地となる要素を『詩論』中に指摘する。

これまで、先秦の詩学を考察する資料は、先秦儒家の説や『左伝』『国語』等の史料に限られていたため、その成果は自ずと広義で曖昧なものにならざるを得なかった。郭店楚簡と上博楚簡の発見はこの状況を打破し、漢代詩学のルーツとなる孟子に代表される北方の詩学と、『詩論』に代表される南方の詩学の存在を浮き彫りにしたのである(注2)。

著者は、漢代に『詩論』の伝本が残存したという推測のもと、これと四家詩との関連性を検証する。特に、四家詩のうち本章が注目する魯詩は、『荀子』との関連性抜きには語れない。『漢書』楚元王伝には、魯穆生・白生・申公が、『詩』を荀子の弟子である浮丘伯に受けたとあることからも、魯詩は荀子の系統に属するとされる。

荀子が晩年を過ごしたのは、楚国の蘭陵であった。『詩論』の下葬年代については諸説あるが、楚都・郢から出土したと考えれば、その下葬年代は秦の将軍白起が郢の近郊を制圧した紀元前二七八年以前となる。また、郢を追われた学者達が遷った陳と蘭陵とは比較的近距離にある。このことから筆者は、蘭陵の荀子には、陳に向かう学者達が携えていた大量の書籍を実見する機会があったはずだと述べる。また、『詩論』と『荀子』大略篇における国風と小雅に関する記述には類似点を見出せるとし、『荀子』が『詩論』の説を吸収したと指摘する。このように筆者は、魯詩が『荀子』を経由する形で『詩論』からの影響を受けたとする。

後に魯詩は、『詩論』の「四類詩」を分類の基礎とした上で、更に新しい「四始説」を設けることとなる(注3)。その背景には、文献の最初と最後とに、特に重要な意味を見出さんとする学問的傾向(公羊学派のような)があった。つまり、申公はこうした背景の中、単なる分類であった『詩論』「四類詩」の首篇に特別な意義を含み持たせることで、「関雎」が「国風」の主題を兼ねるという、詩学の体系化を推進したのである。

ところで、魯詩を含む三家詩が、「関雎」を周への批判もしくは不安を詠んだ詩(例えば魯詩には「周道缺」とある)と解釈するのに対し、毛詩は「后妃之徳」と解釈する。毛詩において「関雎」とは、帝王による教化の起点とされるものであった。

漢代君主専制における思想的制約のもと、毛詩が強調したのは礼儀による情の節制であったと著者は述べる。毛詩による教化とは、統治階級に相応しい倫理的人格の育成、及び理想的な王道政治の実現を目的とするものであった。よって、毛詩序の「〔発乎情、止乎礼儀。〕発乎情、民之性也」とは、「情出于性」(『性情論』)や「民性固然」(『詩論』)をその根拠とする「発乎情」以上に、実は「止乎礼儀」の方を重視するものであった。著者が、『詩論』の学術思想を子思学派の性情理論と礼学とに基づくものとする説は先に述べたが、毛詩はそのうち礼儀の側面を受け継ぐものであった。

このように筆者は、『詩論』と魯詩及び毛詩との関連性について検討するが、同様にその他の詩家についても『詩論』による影響を指摘してゆく。

では、『詩論』の影響が四家詩にまで及んだのであれば、漢人は『詩論』をどのように読んでいたのか。筆者は、類似する記述が『説苑』や『孔子家語』に確認できることから、漢人が『詩論』を読んでいたとし、上の疑問については次のように推測する。すなわち、当時において『詩論』のような詩伝は数多く、それらを遵守すべきとの意識が薄かった。または、漢人は既に形式が整えられた四家詩のみを重視したため、『詩論』のように体裁の不完全な文献は淘汰された。このように筆者は、漢代においてもなお読まれた『詩論』は、四家詩に影響を残しながらも、おそらく最終的には上記の理由で姿を消すことになったと推測するのである。

こうした流れをまとめ、著者は先秦から漢代に至る詩学研究の体系化が三段階にわたって行われたとする。第一に、『詩論』において「四類詩」という分類による体系的詩学の基礎が築かれたこと。第二に、これを基礎として魯詩に「四始説」が現れたこと。第三に、「四始説」に

基づく毛詩において、『詩』の総序としての「関雎」により「詩三百」を総括するという教化体系が完成したこと。

このように本書は、詩学史的見地から『詩論』に資料的価値を認め、春秋時代の詩学と荀子から漢代にまで繋がる詩学を、継承・補完といった「運動」を介して連続させ、新たな詩学史を作り上げてゆくものである。

しかしながら、筆者の手法や結論の中には、疑問に思われる点もある。

第一に、断章取義に対する『詩論』作者の位置付けである。断章取義の風潮が盛んであった春秋時代から、その風潮が残っていた孔子の時代、そして断章取義がなお見られる孟子・荀子の時代へと、筆者の視点は断章取義の風潮の衰退を追いながら推移する。しかし、断章取義の風潮が依然残っている孔子と、孟子・荀子の間に位置する『詩論』の作者については、「它已经突破了此前和时人断章取义的说《诗》方法，作者不是把《诗》当作传达某种志意的工具或媒介，而是从《诗三百》文本出发，直探《诗三百》本身问题」（一六五～一六六頁）、つまり断章取義とほぼ無縁の思考を持っていたとする。しかしながら、『詩論』という文献の性格を考慮した場合、そのような理解は果たして妥当であろうか。

断章取義は、主に外交等における口頭での応接もしくは弁論の場で行われた。よって、外交や弁論の記録という性格を持つ『左伝』『論語』『荀子』では、場中で行われた断章取義も記録の対象となる。だが、『詩論』の性格は必ずしもこれらと同様ではなく、その重点はむしろ『詩』の論評にある。そのため、断章取義による言論が最終的に記録として残り得なかったとの状況も想定できる。こうしたことからも、『詩論』の作者を断章主義との関わりから容易に排除することは難しいように思われる。

第二は、「民性固然」の理解である。先に挙げた「民性固然」について、著者は次のように述べている。

《孔子诗论》说，《甘棠》所表现出来的对召公爱戴之情，《葛覃》所歌咏的归宁父母的喜悦，都是"民性固然"，这不就是《郭店楚墓竹简・语丛二》所说的"爱生于性，亲生于爱"吗？《孔子诗论》说"币帛之不可去也，民性固然"，这不就是《郭店楚墓竹简・语丛二》所说的"情生于性，礼生于情"吗？（一三六頁）

この段落の目的は、『詩論』と性情理論とを援用して「民性固然」を解釈することである。しかし、例えば「葛覃」についての理解は、今本『詩経』のみを参考に

したものであり、『詩論』本文の該当箇所（「吾以〈葛覃〉得敬初之志。民性固然。見其美必欲反其本。夫葛之見歌也，則以叶萋之故也；后稷之見貴也，則以文武之德也。」）を考慮したものではない。つまり、ここでは「民性固然」の前後の文脈に対する考察が不十分なまま『性情論』等の理論に引きつけ、「民性固然」を人性の発生原理を確認する言辞とするのである。だが、『詩論』中に『性情論』と類似する記述があるのならばともかく、『詩論』の「民性」を天命に基礎づけられたものと言い切ることは難しいのではなかろうか。

『詩論』の理論が、子思学派の性情理論から影響を受けたものという著者の指摘については幾度か述べた。しかし、その指摘は『詩論』の総合的な検討からではなく、「民性」の一語のみから導き出したものという印象が強いのである。このように、出土資料や伝世文献の使用において、時折やや強引な印象を受けるのも、著者が、『詩論』の思想史的な流れを明確に位置付けようと強く意識しているためかと思われる。

その他気づいた点として、『荀子』大略篇については、その成立に疑わしい点があるが、著者は今本『荀子』が蘭陵で著されたと考えており、『左伝』の記事を無批判に春秋の史実とする（前掲の季札の例）など、個々の資料批判が十分ではない点も見受けられる。

また、炭素14年代測定の定点が一九五〇年であることを著者が認知していないと思われる箇所もある。上博楚簡の炭素14年代測定の値は、二二五七±六五（三〇八±六五、すなわち上限・下限年代は紀元前三七三から紀元前二四三）である。しかし著者は、上博楚簡の年代測定値が公開された二〇〇一年を定点とするためか、測定値から二五六±六五（上限・下限年代は、紀元前三二一年から紀元前一九一年）との数値を算出している。そのため、この誤算による年代を前提とした論については注意を要するであろう。

最後に、本書以前の『詩論』研究も視野に入れながら、『詩論』研究における本書の意義について考えてみたい。

近年における『詩論』研究について、本書以前に確認できる『詩論』研究の専著には、劉信芳氏『孔子詩論述学』（安徽大学出版社、二〇〇三年一月）、黄懐信氏『戦国楚竹書《詩論》解義』（北京、社会科学文献出版社、二〇〇四年八月）の二冊を挙げることができる。前者は、『詩論』に関する問題を項目ごとに分けて考察したものであり、後者は、従来の竹簡配列説（主に李学勤氏）を参考に、独自の配列・分章を行い、各部に詳細な解説を施したものである。

これらの先行研究に対し、本書は『詩論』に登場する「四類詩」を詩学体系構築の初期段階とする見解を提示し、漢代四家詩と『詩論』との関連性について詳細に検討するなど、『詩論』を中心とする思想史的考察を行うものであった。このように本書は、『詩論』研究、広くは『詩』研究において、示唆に富む新たな視点及び論点を提示してくれている。

上記三冊の専著に限定した上で、ここ近年の『詩論』研究の動向を見ると、『詩論』内部の個別的な問題についての考察から、『詩論』を思想史的に位置付けようとする大局的な視野による研究へと徐々に変化していると言えよう。幸いなことに、新しく公開された『上博博物館蔵戦国楚竹書（四）』には、『采風曲目』『逸詩』等、『詩』とも関連する新資料が収められている。関連資料の一層の充実により、『詩』及び『詩論』の研究が更に前進してゆくことと期待される。

注

（1）池田知久氏の報告によれば、二〇〇〇年八月の「新出土簡帛国際学術研討会」（於北京大学）にて公開された『詩論』は全三十一簡であったという。読解も可能とされる二簡が収録されなかった事情等については、氏も「不明」とする。「「上海楚簡『孔子詩論』に現れた「豊（禮）」の問題――關雎篇評論における人間の欲望を規制するものとしての「豊（禮）」――」（『東方学』第一〇八輯、二〇〇四年）参照。

（2）小寺敦氏「上博簡『子羔』の感生伝説について――楚地域における『詩』受容の視点から――」（『史料批判研究』六号、二〇〇四年）は、北方・南方の別に着目し、楚地における特徴的な『詩』受容の在り方を述べる。氏の論考は『子羔』『魯邦大旱』『詩論』を「同一書籍」とし、荀子以降に楚地で成立したものとするなど、著者の結論と異なる点もあるが、著者同様、地域性の別に着目する点は興味深い。

（3）「四始説」には、「関雎」「鹿鳴」「文王」「清廟」の四篇が、それぞれ「風」「小雅」「大雅」「頌」首篇に置かれることに意味があるとする説や五行に配当する説等がある。本書では、司馬遷が魯詩を学んだこと、及び『史記』孔子世家の「関雎之乱以為風始、鹿鳴為小雅始、文王為大雅始、清廟為頌始」に言及することから、著者の言う「四始説」とは史記説のことであろう。また著者は、魯詩以外の三家にも「四始説」は認められるが、それらは魯詩を起源とするものであるという。